



八王子盲学校だより



令和7年7月発行 第4号
東京都立八王子盲学校長 田島 由紀子

大廈の材は一丘の木にあらず

校長 田島 由紀子

緑の起伏 雲遠き
桑の都の ただ中に
巍々とし建てる わが母校

これは、本校の校歌の冒頭部分です。八王子の豊かな自然の中でたたずむ母校の姿が力強く描かれています。特に「巍々(ぎぎ)」という言葉には、「山のように雄大で厳かな様子」という意味があり、多くの方々の支えによって学校が確かな存在となっていることを表現しているようです。

この校歌の作詞は、昭和28年に本校第4代校長として着任された木村高明先生によるものです。その8年前、昭和20年には戦災によって校舎が全焼し、多くの困難を乗り越えたのち、昭和27年には、新たな校舎が完成しています。当時の校舎完成を迎えた喜びが、校歌冒頭の「巍々とし建てる」という言葉に込められているように思われます。

「大廈(たいか)の材は一丘(いっきゅう)の木にあらず」という言葉があります。これは、中国・前漢時代の王褒(おうほう)が著した『四子講徳論(ししこうとくろん)』に由来し、大きな建物を建てるには一つの丘に生える木だけでは足りない、つまり、一つのことを成し遂げるには多くの人々の協力が必要だということを表しています。学校も同様に、「大廈の材は一丘の木にあらず」、多様な支えと視点によって成り立っています。

本校には、幼稚部から小学部、中学部、高等部普通科に専攻科、寄宿舎があり、それぞれの場面で異なる専門性をもつ教職員が、幼児・児童・生徒たちの学びと生活を支えています。それだけでなく、行政、保護者の皆様、地域の方々といった多様な立場の支援が交わることで、子どもたちの成長をより豊かなものにしています。こうした多様性と協働の力こそが、これからの学校に不可欠な土台であり、柔軟で確かな学びの環境をつくる大切な要素だと感じています。学校は地域とともに歩みながら、未来へ羽ばたこうとする幼児・児童・生徒たちの礎となる場です。この協力と多様な支えの輪を、より強く、より広くしていくことが、本校のさらなる発展につながると確信しています。

今学期を振り返ると、仮設校舎での新たな環境のもと、幼児・児童・生徒たちはそれぞれの目標に向かって真剣に学び、確かな歩みを重ねてきました。移動教室や修学旅行、遠足では、自然や歴史に触れ、仲間とともに学ぶことで、協力や思いやりの心を育んでいました。現在、校舎改築工事が進行しておりますが、これもまた、本校の未来を支える新たな礎となる取組です。一人の力では成しえないことも、多様な立場の皆様の支えがあつてこそ、少しずつかたちになっていきます。工事に伴い、御不便をおかけしておりますが、皆様の温かい御理解と御協力に心より感謝申し上げます。新校舎が完成すれば、幼児・児童・生徒たちはさらに充実した環境で学ぶことができるようになります。これからも、多様な個性と力が響き合う学び舎として、未来を担う幼児・児童・生徒たちのために、皆様とともに歩んでまいります。引き続き、変わらぬ御支援を賜りますようお願い申し上げます。

各学部・科の振り返り

<幼小学部>

主幹教諭 二方 宏和

小学部に新1年生を迎え、総勢16名でスタートした今年度の幼小学部です。元気いっぱいのにぎやかな幼小学部、1階のフロアでは毎日子供たちの元気な声が聞こえます。

4月はさわやかな春の風の中、屋上での新入生歓迎会、5月は昭和記念公園へ春の遠足、4、5、6年生は高尾の森わくわくビレッジへ移動教室、6月は6年生のこころの劇場の観劇会など、いろいろなイベントがありました。それ以外にも、仮設校舎のちょっと狭いスペースに畑を作ったりプランターを置いたりして花や野菜を育てています。植物に毎日お水をまいて収穫の日を楽しみに成長を見守っています。そこに集まったアゲハ蝶やモンシロチョウ、カブトムシの幼虫を教室で飼育するクラスもありました。成虫になるまで育てた蝶々を外に放したときは命のすばらしさを感じたことでしょう。

日々のお勉強だけでなく、体験的な学習を随所で行い、様々な学びの機会をもっています。

<中学部>

主幹教諭 栗本 みゆき

「失敗を恐れず、積極的に」。4月当初、1学期に心掛けてほしいと生徒達に送った言葉です。1年生2名、2年生2名、3年生4名、総勢8名の生徒達は、様々な活動に積極的に取り組んでいます。

5月、1・2年生は移動教室(1泊)で神奈川・山梨方面に、3年生は修学旅行(2泊3日)で宮城県に行きました。事後学習の宿泊行事報告会では、互いの経験(1・2年生は自然散策・ピザ作り・キャンプファイヤー・木工やガラス工房の体験、3年生は日本三景松島での観光や、東日本大震災の被災地である石巻で、当時の新聞記者の話を聞くなどの防災学習の様子等)や、感想を発表し合いました。また、中学部・普通科生徒対象の校内弁論大会では、中学部から3名が参加し、好きなことや趣味、自分の眼についてのことをテーマに、堂々と発表しました。生徒達の表情から、学んだことや考えを発表する経験が生徒の成長につながることを改めて実感しました。今後もこうした取組を大切にしていきます。

<高等部普通科>

主任教諭 川嶋 拓

普通科の1組には、「産業社会と人間」という授業があります。この授業は、将来の進路に向け、生徒一人一人が主体的に考え、行動し、自己の生き方を考えることを大切にしています。

今年度からは、各学年で履修時間の異なる「産業社会と人間」の時間を同じ曜日に合わせて行っています。全学年合同の学習を通じて、集団の確保と共同学習の機会を設けています。これにより、生徒は異なる学年の仲間と協力し合い、多様な視点から学びを深めることができます。

また、授業では実践的な学びを重視しています。作業的な内容の他、ビジネスマナーの基礎となる態度や姿勢を育てることに重点を置いています。報告、連絡、相談の重要性を学び、実践することで、社会人として必要なコミュニケーションスキルを身に付けます。

<高等部理療科>

主幹教諭 野村 利己

令和7年度の理療科は、生徒総勢7名でスタートしました。4月当初は皆、どことなく緊張した面持ちでしたが、1年生も学校生活に慣れ、2・3年生と楽しく交流している様子が見受けられます。

先日、学校運営連絡協議会で、協議委員をされている卒業生に久しぶりにお会いしました。卒業後、理療の資格を生かして社会で活躍されている姿に元気をもらいました。平成8年度卒業とのことで、当時の在籍者数を調べたところ、全校幼児児童生徒数は91名、理療科生徒だけで31名いました。その当時の学校の賑やかさや生徒の名前・顔などが懐かしく思い出されました。

近年は、盲学校在籍者数の減少傾向が続いています。デメリットに目が向けられがちですが、小集団であることのメリットを最大限に生かし、目標実現に向けて思い切り学生生活をエンジョイしてほしいと思います。